
(3) 酒田のオリジナル・ストーリー

オリジナル・ストーリーとは、酒田独自の地域性が生み出した固有の理念や観光振興の基本的な思想に基づくものであり、市民自らが認識し地域の誇りとして感じる柱となるものである。

<オリジナル・ストーリーとしての“交易と公益”>

酒田は最上川河口に位置しており、最上川を通じて内陸から紅花や米など豊かな農産物が数多く集積した商都である。さらに、北前船交易の寄港地として栄え、全国各地から集積した豊かな食材は北前船でもたらされた京の文化と融合し、現在でも料亭やフランス料理店などに息づいている。

また、北前船交易で栄えた豪商たちは“酒田三十六人衆”とよばれ、豪商の中には本間家のように、私財を投じて町のために様々な投資を行うなど、公益に資する事業を積極的に行ってきた豪商も存在する。

上記のように、酒田は“交易”と“公益”で発展してきた地域であることから、酒田の観光を考える場合には酒田の地域性や土地の歴史・文化を十分に踏まえて進めていくことが重要である。北前船交易や最上川舟運の“交易”と、豪商たちのまちづくりの精神“公益”を基本的な柱として観光振興を進めていくことが重要である。

よって、酒田の中長期観光戦略のオリジナル・ストーリーとして、“交易”と“公益”を2つの柱として設定し、「KOEKI (交易と公益) のまち・酒田」とする。

<オリジナル・ストーリー>

KOEKI (交易と公益) のまち・酒田
～ 港町文化とおもてなしのまち・酒田 ～

<“交易”：北前船や最上川舟運で栄えた酒田の特性>

酒田市は北前船交易で栄えた港町である。古くから最上川舟運によって内陸から運ばれる米の集積地であり、敦賀や小浜を經由して関西方面と結ぶ海上輸送の拠点であった。酒田からは、最上川の舟運によって集められた米や紅花が北前船に積み込まれ、酒田の商人は多大な富を築いた。その意味で酒田は、まさに“商都”であった。

このように、最上川河口と日本海に面した固有の地形・地勢により、寄港地として繁栄し、現在の酒田市の都市骨格の原型を形成した固有の歴史・文化を持っている。地元食材だけでなく、山形県内からは最上川源流域から紅花や米などの様々な食材がもたらされ、さらに北前船交易によって遠く北海道の食材などが運ばれた。同時に京都をはじめとする上方文化ゆかりの建物・倉庫・庭などの建造物、暮らしの文化、固有の調理法や食の作法といった豊かな食文化ももたらされた。まさに酒田は“交易都市”として独特の発展を遂げてきたのである。

<“公益”：豪商「本間家」等による地域風土としての特性>

酒田三十六人衆の一人であった本間家は、砂防植林事業で有名な三代目・光丘だけにとどまらず、累代様々な社会貢献活動や事業を行っている。その時代の支配者への財政再建援助や、明治以降は行政その他への資金援助、あるいは自ら公共施設の建設・運営にあたり、それらへの献金、慈善事業、救済事業、育英事業など広範囲に及び行ってきた歴史であり、「世のため人のために尽くす」公益活動を実践してきた歴史でもある。

本間家は、庄内地域はもちろんのこと、近隣の東北諸藩の地域再建、地域振興のリーダーとして、庄内外の物資の交流、金融業、土地管理などのビジネスで稼いだ利益をさまざまな公益事業に拠出し経営してきた。この意味において、“公益”の精神によって商売で得た利益を地域へ還元し続けたのである。酒田には、地域風土としてこの“公益の精神”が根付いているといえよう。